第８話：三度目の暗転

――バチ、バチバチッ！

激しい火花の音とともに、弱々しく灯っていたブラケットライトが完全に消灯した。予備の自家発電機がいよいよ限界を迎えたのか、館は三度、完全な漆黒の闇へと突き落とされた。

「いや、いやぁっ！また暗闇なんて…！」

「動かないで！誰がどこにいるかわからないから！」

誰かの悲鳴と怒号が闇を引き裂く。しかし、この暗闇こそが、おしりを狙う者たちにとって最高の「狩り場」だった。外見だけで判定されるルールにおいて、確実に［男カラダ ➔ 女カラダ］あるいは［女カラダ ➔ 男カラダ］の条件を満たすためには、闇に紛れて無差別に触り、カラダの反応を確かめるしかない。

フサッ、と衣服が擦れる湿った音が闇に響く。

「ひゃうんっ…！？」

驚愕と、脳を直接灼くような艶めかしい嬌声が響いた。直後、別の場所からも

「あぅっ…！」

と、無理やりおしりを鷲掴みにされた男か女かもわからぬ短い絶頂の息遣いが漏れる。

「これよ、この感触…！」

「触るな！離せ…ああっ、そこは、だめぇッ…！」

暗闇の中で繰り広げられる、触覚と快感だけを頼りにしたカラダと魂の強奪戦。衣服が激しく擦れ合い、肉と肉がぶつかる妖艶な音が、冷え切った広間を狂おしい熱気で満たしていく。魂はさらに激しくシャッフルされ、誰が誰を触り、誰が感じさせられたのか、その境界線は完全に闇へと失われていくのだった。

――バツンッ！

不意に館の予備電源が作動し、広間に禍々しい明かりが戻った。しかし、そこに広がっていたのは、先ほどまでの心理戦が温く思えるほどの異様な光景だった。

大河（中身？？）：「あ、う…」

大河（中身？？）は、不安そうな表情であたりを見回し、ソファへ崩れ落ちるようにお行儀よく足を揃えて座り込んだ。その瞳は、本来の大河ではない、周囲の目を気にするか弱い小動物のようだったが、すぐに意を決して、琴葉（中身？？）や陽花里（中身？？）のおしりを触ろうと動き始めた。しかし、…

第９話：動き出す者たち（理人視点）

先ほどまでとは明らかに違う雰囲気となった大河の瞳が３人を捉え唇が歪んだ。

大河（中身？？）：「…あはははは…！」

大河のカラダから漏れ出たのは、４人の魂から出たとは思えない異質な存在だった。悍ましい囁きが広間に木霊する中、３人は、互いに油断なく距離を取っていた。琴葉（中身？？）が小さく息を呑み、右手の人差し指で、自分の乱れた髪を気に掛けるように不安そうな表情のまま振舞っていた。

琴葉（中身？？）：「大河？」

琴葉（中身？？）の口から、いつもとは違う強気なトーンの声が漏れる。一方、大河（中身？？）は、その視線を受け流すように、足をエレガントに組み、冷酷な笑みを浮かべていた。その立ち振る舞い、他人を見下す傲慢な微笑みは、大河とは程遠かった。

琴葉（中身？？）：「誰？どうして大河のカラダに乗り移っているの？…大河のカラダから出て行ってください！」

しかし、大河（中身？？）は、その言葉に意を介さず、４人を妖艶にそして、支配的に眺めていた。しかし、理人は、冷静だった。陽花里にカラダを奪われた際は、敢えてフリーとなり、俯瞰して状況を観察していたが、この状況を看過できないと、陽花里のカラダに乗り移っていたのだ。

理人：（ごめんね。陽花里。君のカラダを借りるよ！）

陽花里（中身理人）は、広間の隅にある重厚なマホガニーの机に向かい、古びたノートを開くと、取り憑かれたようにこれまでの接触ルートを書き殴り始めた。

『暗転１：［？？］→［？？］（何かが起こった）』
『密室：［？？］→［陽花里］→［理人］（陽花里に誰かが乗り移り、陽花里の魂が理人のカラダに入り、理人の魂が追い出された』
『暗転３：大河（中身舞夜）、陽花里（中身理人）』

理人：（ここまでは確定だ。そうなると…僕が琴葉ではなく、陽花里のカラダに乗り移ったのは何故だ？待てよ…今の琴葉は、琴葉じゃない…あの感じからすると…陽花里の可能性が高い。大河の危機に演技をしていられなくなったんだろう…）

『暗転３：大河（中身舞夜）、陽花里（中身理人）、…琴葉（中身陽花里）』

陽花里（中身理人）は、最後に仮説を書き足す。

第 10 話：謎解き（理人視点）
理人：（残るのは、僕のカラダと…魂は、大河か…琴葉ということになる…）
『暗転 3：大河（中身舞夜）、陽花里（中身理人）、…琴葉（中身陽花里）』
　夢中になって突き詰める理人の陰で、琴葉（中身？？）に危機が迫っていた。

大河（中身？？）：「…うるさいわね…こうしてあげる💕」
琴葉（中身？？）：「な…何するのよっ！」
　大河（中身？？）は、琴葉（中身？？）のおしりを激しく揉みしだいた。感じてしまえばどうなるか、よくわかっている。しかし、女性である舞夜は、おしりのどこをどう触れば良いか熟知している。そしてついに…

琴葉（中身？？）：「あっ！ン…あぁん💕」
大河（中身？？）：「…もらったわ💕」
　ぴくんとした琴葉のカラダに、大河のカラダを抜け出した舞夜が重なり、あっという間に支配した…ノートを凝視する理人の背後に、琴葉（中身舞夜）が音もなく近づく。

琴葉（中身？？）：「随分と熱心に計算しているのね、理人。」
　陽花里（中身理人）は、ペンを止めず、振り返りもせずに答えた。
陽花里（中身理人）：「陽花里…いや…まさか…！」
琴葉（中身舞夜）：「ええ…正解、舞夜よ💕」

　普段の大人しい琴葉からは、想像すらできない妖艶で大人の女性として振舞う琴葉（中身舞夜）。
陽花里（中身理人）：「正体を見破られたら魂が消滅するんじゃなかったのか？」
琴葉（中身舞夜）：「そうよ。見破られてはいない。自白したからね💕さあ、続けて…そこまでは正解よ。邪魔はしないわ。わたしたちカラダは女同士だから、わたしに触られる心配もないでしょ。」

　陽花里（中身理人）は、再びペンを握った。
理人：（今ので陽花里の魂は、どうなった？可能性としてはこうだ…）
『現在：琴葉（中身舞夜）、陽花里（中身理人）、陽花里、琴葉、大河の魂（大河か理人のカラダ or フリー）…』

理人：（ん…待てよ…大河のカラダに大河の魂…組み合わせとしてはあり得るけど……ダメだ…陽花里の脳を使っているせいか…頭が上手く回らない…でも…）
　陽花里（中身理人）は、直感でその組み合わせを否定した。

第 11 話：魔女の追及（理人視点）

ペンを握る理人の指先は、興奮と恐怖で小さく震えていた。この可能性を考えたとき、大河の魂が行方不明だということになる。そしてもう一つ…理人が感じる困惑…この陽花里のカラダは、これまでに自身が「おしりを触られた時の極上の快感」が残っている。陽花里のカラダに刻み込まれた熱い愛撫。その快感が陽花里の脳を、いやそこにいる理人の心を徐々に蝕んでいた…

陽花里（中身舞夜）は、冷酷に微笑む。

琴葉（中身舞夜）：「気づいたようね。でも…それを口にして本人に伝えることができるかしら…あなたに…」

陽花里（中身理人）：「もちろん…そんなことはできない！誰かの魂を消滅させる訳にいかないからな！」

琴葉（中身舞夜）：「理由は…本当にそれだけ？あなたは…だんだんとその女のカラダでいたいと思っているんじゃなくて？」

陽花里（中身理人）の喉がごくりと鳴った。湧き上がる情動は、陽花里の全身を駆け巡っている。視線を落とすと、ぱらっと陽花里の長い髪が頬に掛かり甘い香りがする。

理人：（僕が…陽花里に…）

ノートの頁をバサリと閉じる音が、静まり返った広間に重く響き渡った。琴葉（中身舞夜）は、妖艶な足取りで理人へと歩み寄り、その顔を覗き込んだ。

琴葉（中身舞夜）：「理人。素直になりなさい…」

琴葉（中身舞夜）は、すべてを見透かすような視線で陽花里の美しいカラダに手を伸ばしていた。

陽花里（中身理人）は、机に手をついたまま、琴葉（中身舞夜）のプレッシャーに息を詰まらせていた。理人と大河の姿が見えない。だが、２人を探している状況ではなかった。対峙する二人の間に、張り詰めた沈黙が流れる。

理人：（これがおしりを触られるという感覚…なんて幸せを感じるんだ…このままこのカラダにいてみたい…でもそうしたら…陽花里は…みんなは…）

琴葉（中身舞夜）：「理人。君は、自分の脳でロジックを組み立てているけど…」

琴葉（中身舞夜）は、琴葉の華奢な手で自らのおしりに手を当て、妖艶に微笑んだ。

琴葉（中身舞夜）：「カラダはね、君の小難しい計算なんかより、もっと正直に記憶しているのよ。触られた時の手のひらの大きさ、指の節の硬さ、そして―その愛撫によって、どれだけ狂うほどの快感に頭を灼かれたかをね。」

第 12 話：明かされた謎（理人視点）

　陽花里のカラダには、これまで刻まれた強烈な書斎で大河が背後から無防備なおしりを包み込んできた、肉厚で強引な手のひらの質量快感の余韻が、今なお熱く残っている。

理人：（これは…大河のカラダ！？ということは…大河が陽花里のカラダに乗り移ったということか…でもそれなら何故その後…）

　陽花里の脳に再び理性が宿る。

理人：（大河のカラダを探しに行ったとき、陽花里のカラダは、確かに大河のおしりを激しく触っていた…女が男のおしりを触っているなら、陽花里のカラダにいた大河は、元のカラダに戻ったことになる…待てよ…）

琴葉（中身舞夜）：「ふふ…」

陽花里（中身理人）：「もしかして…舞夜、お前は最初に大河のカラダに乗り移ったんじゃないのか？そして、大河のカラダを使って大河のフリをして、陽花里を呼び出した。陽花里のカラダに乗り移るために…そう考えれば、あのとき、陽花里が大河のおしりを激しく揉んだときの反応も理解できる。あのとき、大河のカラダには、魂がなかった。だから陽花里が大河のおしりをどんなに揉んでも感じさせることはできずに、そのカラダに乗り移ることもできなかったんだ！」

　琴葉（中身舞夜）は、表情を崩さず前へ踏み出して、陽花里（中身理人）に近づいた。

琴葉（中身舞夜）：「面白い推理だけど…そうだとしたら何故、わたしは、乗り移れないとわかっている大河のおしりを撫で回したのかしら？」

陽花里（中身理人）：「お前も知らなかったんじゃないのか？魂が空だということを。」

琴葉（中身舞夜）：「ふふ…そこまで見抜くなんて大した子ね…そう…その通りよ。一度、陽花里のカラダに乗り移ったのは、陽花里にわたしを大河と思わせて味方に引き入れるためってことよ。」

　琴葉（中身舞夜）は、潔く認め笑みを浮かべながら真実を話した。

琴葉（中身舞夜）：「完璧な乗っ取り計画だったわ…だけど、一つだけ誤算があった。」

陽花里（中身理人）：「魂が変わっても、カラダに残る『愛撫の感触』は消せない。陽花里が記憶しているこの極上のエクスタシー…それがあったから真実に近づくことができた。でもそれなら何故だ。何故、僕にヒントをくれたんだ…」

　陽花里（中身理人）が最後の謎に直面し、琴葉（中身舞夜）を問い詰めていった。すると、琴葉（中身舞夜）が、狂おしい高笑いを広間に響かせた。

第 13 話：魔女の真意（理人視点）

琴葉（中身舞夜）：「うふふ💕この状況でそれがわからないなんて…可愛いわ…そのカラダに入って思考が鈍っているのかしら…」

琴葉（中身舞夜）は、陽花里（中身理人）の背後に素早く回ると、その整ったおしりを丁寧に揉みしだいていった。

陽花里（中身理人）：「何を…こんなことをしてもカラダは…」

突然の行為に陽花里（中身理人）は、完全に無防備に琴葉（中身舞夜）にされるがままとなっていた。

琴葉（中身舞夜）：「…ええ、わたしたちのカラダは今、女同士。だからどんなに感じさせても、ルール上、魂が入れ替わることはないわ。」

陽花里（中身理人）：「…ああっ、そこは、あッ…あ…ん！」

琴葉（中身舞夜）のしなやかな指先が陽花里（中身理人）のふくよかなおしりをとらえて離さない。

琴葉（中身舞夜）：「…でも、だからこそ安心でしょう？ あなたの理性を、ただ純粋な快感だけでじわじわと焼き溶かしてあげる…💕」

陽花里（中身理人）：「…んっ…まさか…最初からこれが…あっ…はぁん！」

琴葉（中身舞夜）：「さあ…来なさい…君は、わたしと共に歩むのよ💕」

琴葉（中身舞夜）のカラダから、悍ましい魔力の波動が放たれた。そのエネルギーが陽花里（中身理人）のカラダ内に流れ込む。

陽花里（中身理人）：「ああ…なんだ…この寂しい感情は…ああ…舞夜さん…あなたの記憶が流れてくる…あなたは…こんな酷いことをされて…」

理人の優しい心は、舞夜から流れる記憶や感情を流し込まれ、完全に共感している。

琴葉（中身舞夜）：「やはりわたしが見込んだ人だわ。わたしを受け入れてくれるのは、君だけ…わたしの望みは…言わなくてもわかるわね。」

陽花里（中身理人）は、頷くと、陽花里の脳をフル稼働させ、大河のカラダを捜索し始めた。そしてついに大河のカラダを見つけ出した。

琴葉（中身舞夜）：「さあ、理人。最後の儀式よ！わたしが大河のおしりを揉みしだいて快感を与えてあげるから、そのカラダを暴れないように抑えていて…」

大河（中身？？）：「…何をするんだ。魔女の味方をするなんて！や…止めろ！」

陽花里（中身理人）は、豊満な胸を大河（中身？？）へ押し当てて、その動きを鈍らせた。必死に抵抗する大河（中身？？）だったが、琴葉（中身舞夜）の手が伸びていた…

第 14 話：魔女の成就

大河（中身？？）：「はうっ…ああ…こんなこと…ダメなのに…」

　初めて受けるオンナからの愛撫…先ほどまで強がっていた大河（中身？？）も舞夜の洗練された揉みテクによって骨抜きになっていた。つつっ～っと這うような琴葉（中身舞夜）の指の動きに大河のカラダは、ぴくんっぴくんっと反応してしまっていた。

琴葉（中身舞夜）：「やっと戻れるのね💕このカラダに…こんなに感じるカラダが永久にわたしのモノになるなんてゾクゾクするわ～💕」

　清楚で大人しい琴葉の表情でそのように魅惑的な言葉を発する姿を見て、陽花里（中身理人）もゾクゾクしていた。

大河（中身？？）：「ひゃあんっ…あっ…どうなっちゃうの…あたし…」

　その様子から大河に乗り移っている者は、女性のように感じられ、大河のように振舞うことができなくなっていた。

琴葉（中身舞夜）：「じゃあもらうわね💕このカラダ💕定住するわ💕」

　大河（中身陽花里）のカラダが娼婦のように反応すると…動かなくなり…再び動き出したときには、魔の者が宿っていた…大河（中身舞夜）は、自らの手に入れた男のカラダをこれ見よがしにくねらせ、おしりを挑発的に自分で揉みだした。

大河（中身舞夜）：「君にこのおしりを揉んで欲しいところだけど…」

陽花里（中身理人）：「わかっています。敢えて僕のカラダにそれをさせるんですね！…でも…それには僕のカラダに乗り移っている者に定住を宣言させる必要がある…」

　陽花里（中身理人）は、再び陽花里の脳をフル稼働させ、理人のカラダを捜索し始めた。そしてついに理人のカラダを見つけ出した。

陽花里（中身理人）：「僕は理人だ。僕は、大河となった舞夜さんと、この陽花里のカラダで生きることにしたんだ。だから君も僕のカラダに永住するといい。舞夜さんの、大河のおしりを揉みしだいて欲しいんだ。そうしたとしても君はそのカラダのままだ…」

理人（中身琴葉）：「理人さん…そう…なんですね…あなたの心は、既に舞夜さんにある…それならわたしは…せめてあなたのカラダだけでもらいます！そうすればあなたのカラダは、わたしだけのモノになる…定住します！わたしは…琴葉です！舞夜さんを悦ばすというのだったら…わかりました。」

　理人（中身琴葉）は、哀しそうな表情をしながらも、すぐに満足した表情となり、大河（中身舞夜）の男の手が、ゆっくりと、しかし確実に大河のおしりへと伸びていく。

第 15 話：魔女の凱旋

理人（中身琴葉）は、大河（中身舞夜）のジーンズの布地を介して、おしりを優しく揉みしだいていった…理人（中身琴葉）の手のひらが大河（中身舞夜）の肉厚なおしりをガチリと捉えた。そして、肉を深く抉るように激しく揉みしだいた。

大河（中身舞夜）：「さすがね…理人…琴葉の恋心を利用して、自分のカラダに定着させるなんて…それにしても…ん…んんっ…やっぱり自分で触るよりも触られるほうが…いい💕このカラダ最高だわ！」

極限まで高まった魔力と、衣服を無視して脳髄を灼く強烈な快感が、大河（中身舞夜）のカラダのナカで激しく混ざり合った。限界を迎えたエネルギーにより、皮膚の隙間から眩いばかりの精神的な閃光が放たれ、広間が真っ白な光の中に呑み込まれていく。

大河（中身舞夜）：「あああッ…！魂が、カラダが、完全に一つになっていく…！！」

限界まで膨れ上がった魔力の閃光が収束した瞬間、洋館の全域に凄まじい精神的衝撃波が駆け抜けた。おしりを通じてこれ以上ない極上の快感を受け止めた魔女・舞夜の魂は、衣服の奥底まで染み渡る悦楽とともに、大河のカラダを完全に手中に収めていた。サークルの頼れるリーダーだった大河のカラダは、今や完全に魔女舞夜の現世への依り代として強奪されたのだ。

陽花里のカラダを定住先として選んだ理人、その理人を慕い理人のカラダを譲り受けた琴葉…理人の魂は、舞夜の呪いそのものを引き継ぐ「新たな魔女」として、禍々しく覚醒してしまったのだ。そして残された琴葉のカラダには…大河の魂が乗り移るしかなくなっていたのだ。こうして 4 人は、舞夜に付き従い、行動を共にすることになっていた…

陽花里：「あ、あはは…！まだ終わってない！」

4 人の足音が廊下の奥へと消え去り、静寂が戻ったはずの広間に、再び禍々しい冷気が立ち込めた。魂となった陽花里もまた、残された魔力の余韻によって精神を完全に支配され、舞夜の呪いそのものを引き継ぐ「新たな魔女」として完全に覚醒していたのだ。陽花里の幽カラダの可憐な瞳が、怪しく紫色に染まる。第 3 の魔女・陽花里が誕生したのだった。

やがて…この館を訪問した者は、奇妙な経験をすることになる…館に入る前と入った後で全然性格が変わってしまうと言うのだ…快活で優しかった女性がガサツになったり、そのガサツだった男性が、改心したように思いやり溢れる好青年になったりなどだ…しかし誰もがそこで何があったかは語らず、不思議と男女の仲は、良くなっていったのだった。

ネタバレ、ストーリーの流れ、灰色は本編で非開示

幽カラダの舞夜が大河のカラダを乗っ取る。大河（中身舞夜）＜2 話＞
大河の魂は、フリーとなる。大河は迷った挙句、陽花里ではなく、琴葉のカラダに憑依し、琴葉を演じる。琴葉（中身大河）
琴葉の魂は、フリーとなる。大河のカラダが空いていたが、そのカラダに乗り移ることには、生理的に嫌悪感があり断念する。一方、理人のカラダに入ることもできたので、そうするか迷うが、その勇気がなく、空中を彷徨う。琴葉の魂フリー
↓
大河（中身舞夜）が陽花里を味方に引き入れるため、書斎に連れ出しカラダを奪う。陽花里（中身舞夜）＜5 話＞
陽花里の魂は、フリーとなり、大河のカラダに乗り移ろうとするが、それができず、代わりに理人のカラダに憑依する。このとき、舞夜は、シールドを張って陽花里の魂の侵入を阻止していた…陽花里は、大河が自分の陽花里のカラダに入ったと思い込み、舞夜の狙い通り、大河と協力関係になる。理人（中身陽花里）
理人の魂は、フリーとなるが、状況を俯瞰するため、敢えて空中を彷徨う。理人の魂フリー＜5 話＞
↓
陽花里（中身舞夜）は、広間に戻り、陽花里として振舞う。＜6 話＞
↓
陽花里の協力を得た舞夜は、トイレから戻らない大河を心配するフリをして、大河のカラダに近づき、隙を見て、そのおしりを触り感じさせ乗り移ろうとする。しかし、このとき大河のカラダには、誰の魂も入っておらず、舞夜が大河のカラダに移動することはできなかった…＜7 話＞
↓
このままではまずいと焦った琴葉は、意を決して大河のカラダに飛び込む。大河（中身琴葉）＜8 話＞
↓
すぐに女性（自分＝琴葉か陽花里）のおしりを触って、大河のカラダから脱出しようとする。しかし、その前に大河のカラダに誰かがいることに陽花里（中身舞夜）が気付き、隙を見て大河（中身琴葉）のおしりを揉みしだき感じさせ大河のカラダを乗っ取る。大河（中身舞夜）＜9 話＞
琴葉の魂は、再びフリーとなる。琴葉は、意を決して想い人の理人のカラダに憑依する。琴葉は、秘かにこのカラダに定住したいと考え、姿を隠す。あわよくば、自分の琴葉のカラダに理人を乗り移らせたいと祈っている。理人（中身琴葉）
陽花里の魂は、フリーとなる。陽花里は、訳がわからず空中を彷徨う。陽花里の魂フリー

↓
状況が緊迫していることを理人が察知し、満を持して陽花里のカラダに憑依し、謎解きが始まる。陽花里（中身理人）＜10 話＞
うるさく追及してくる琴葉（中身大河）を黙らせるため、大河（中身舞夜）は、琴葉のおしりを揉みしだき感じさせ、琴葉のカラダを乗っ取る。琴葉（中身舞夜）
大河の魂は、フリーとなる。謎解きをする理人は、陽花里のカラダにいるため、邪魔をしないよう敢えて空中を彷徨う。大河の魂フリー
陽花里は、舞夜が大河のカラダに執着していることを察知し、これ以上舞夜に大河のカラダを使わせまいと大河のカラダに憑依し姿を隠す。大河（中身陽花里）
↓
陽花里（中身理人）が舞夜の行動・計画を看破するが、舞夜は、陽花里（中身理人）のカラダの快感を刷り込み、自らの境遇を共有させることで味方に引き込む。＜11～13 話＞
↓
陽花里（中身理人）が大河（中身陽花里）のカラダを探し出す。＜14 話＞
琴葉（舞夜）が嫌がり抵抗する大河（中身陽花里）のおしりを揉みしだき、最上の快感を与え、そのカラダを奪う。大河（中身舞夜）
理人のカラダに入っていた琴葉は、理人の行動に絶望するが、せめてカラダだけでも理人が欲しいと理人のカラダに定住することを決意する。
陽花里の魂は、理人のカラダ（琴葉が定住すると決めたため侵入不可）にも、大河のカラダ（舞夜が定住すると決めたため侵入不可）にも乗り移ることができず空中を彷徨う。陽花里の魂フリー
琴葉のカラダに大河の魂が入り込む。琴葉（中身大河）
↓
舞夜は、大河のカラダに定住すると宣言する。＜15 話＞
理人も陽花里のカラダに定住すると宣言し新たな魔女が誕生する。
大河も琴葉として生きることを決意する。
フリーとなっていた陽花里が闇堕ちし新たな魔女として覚醒する。

『キャラクター詳細解説』

1. 大河（たいが）

【魂の変遷】大河（1 話）＜被タッチ＞➔ フリー（2 話）＜憑依＞➔ 琴葉のカラダ＜被タッチ＞（2～10 話）➔ フリー（10～14 話）＜憑依＞➔ 琴葉のカラダ（14～15 話）

- **第 1 話～第 2 話（暗転 1 まで）：**
  自信家で快活なサークルのリーダー。恋人・陽花里との関係も良好で、調査を成功させることしか頭にありませんでした。しかし第 2 話の最初の暗転時、闇の中で突如背後から舞夜に襲われ、おしりを激しく揉みしだかれます。男としてのプライドも理性も一瞬で焼き溶かされるほどの極上の快感（絶頂）を味わわされ、魂をカラダから弾き出されてしまいました。
- **第 2 話～第 8 話（琴葉のカラダでの潜伏期）：**
  フリーとなった彼の魂はパニックになりますが、陽花里のカラダに入ることは躊躇し、大人しい「琴葉のカラダ」へ憑依することを選びます。第 3 話以降、彼は「ガサツな自分」を隠し、必死に大人しい琴葉のフリを演技していました。第 4 話で、自分の元のカラダ（中身舞夜）が陽花里を書斎に連れ出そうとした時、彼は「魔女が自分のカラダを使って陽花里を襲おうとしている」と気付き、激しい焦燥に駆られます。第 7 話で、廊下に倒れている自分の元のカラダを見つけた際、彼は魔女の出方を探っていました。
- **第 9 話～結末（正体露呈と諦念）：**
  その後、第 10 話まで琴葉のカラダで出方を伺っていましたが、自分のカラダを護るため、あまりにうるさく舞夜を追及したため、舞夜に襲われて絶頂させられ、琴葉のカラダを奪われます。最終的に行き場を失い、再び「琴葉のカラダ」に入るしかなくなった彼は、サークルの仲間も自分のカラダもすべてを失った現実に直面します。絶望の末、彼は、「琴葉として生きる」という狂気の決意を固め、舞夜の軍門に降りました。

物語の深み

第 2 話で舞夜に快感を与えられ、カラダを追い出されたものの、**愛する陽花里のカラダを奪うことはせず、最後までその姿勢が一貫しています。**琴葉のカラダに乗り移った後も何とか状況を打破しようと考えますが、**琴葉になり切ろうと言動を琴葉に合わせたことで、彼の長所である思い切りの良さや行動力を一切生かすことができなくなってしまうことがもどかしく、悲劇を引き起こす一因となってしまいます。**

2. 陽花里（ひかり）

【魂の変遷】陽花里（1～5 話）＜被タッチ＞➔ フリー（5 話）＜憑依＞➔ 理人のカラダ（5～9 話）＜被タッチ＞➔ フリー（9 話）＜憑依＞➔ 大河のカラダ（9 話）＜被タッチ＞➔フリー（14～15 話）➔ 第 3 の魔女（15 話）

- **第 1 話～第 5 話（書斎での惨劇まで）：**
  大河を心から愛する一途なギャル。恐怖の洋館でも大河の後ろにぴったりついて安心感を得ていました。しかし第 4 話、頼れる彼氏だと思ってついていった書斎で、大河（中身舞夜）から電光石火の速さでおしりを鷲掴みにされます。「大河になら触られてもいい」という愛着と、衣服を無視して脳髄を灼く呪いの快感が混ざり合い、強烈な絶頂とともに魂を弾き出されました。
- **第 5 話～第 9 話（理人のカラダでのパニックと猜疑心）：**
  弾き出された彼女は「大河が私のカラダに入った」と思い込み、自分も大河のカラダに入ろうとしますが、舞夜のシールドに阻まれて弾かれます。仕方なく広間の「理人のカラダ」へと憑依した彼女は、男のカラダにパニックになります。第 6 話で、自分のカラダ（中身舞夜）が戻ってきた際、自分のギャルの癖（一人称など）を真似してくれているのを見て、「大河が私を庇って演技してくれている！」と完全に誤認し、大河（舞夜）への信頼と協力を誓います。
- **第 9 話～結末（裏切りと覚醒）：**
  第 9 話で琴葉にカラダを奪われ、フリーとなりますが、すぐに大河のカラダを手に入れて、舞夜から身を隠して護ろうとしました。しかし、第 14 話で、理人によって発見され、陽花里（中身理人）と大河（中身舞夜）が、結託して自分を裏切ったことを知ります。舞夜の手によって大河のカラダから弾き出され、定住先を完全に失った彼女の魂は、「大好きな大河を舞夜に奪われた」「信じていた絆に裏切られた」という底なしの嫉妬と絶望の末、館の残留魔力と完全同調。可憐な瞳を紫色に染めた「第二の魔女」として禍々しく覚醒してしまいました。

物語の深み

第 6 話で陽花里（中身舞夜）が不自然に鼻で笑い、理人（中身陽花里）が**「大河がわたしの真似してくれている！」と勘違いして感動しているシーンが、彼女にとって、どれほど皮肉で残酷であったか**が浮き彫りになります。陽花里もまた、大河のカラダに憑依するなどして健気に大河を舞夜から護ろうとします。しかし、**最終的に魔女に篭絡されたとはいえ、その理人に裏切られてしまい、大河の存在を感じられないまま、絶望していく様子が切なさを感じます。**

3. 理人（りひと）

【魂の変遷】理人（1～5 話）＜被タッチ＞➔ フリー（5～10 話）＜憑依＞➔ 陽花里のカラダ（10～15 話）➔ 第 2 の魔女（15 話）

- **第 1 話～第 5 話（状況の俯瞰）：**
  サークルの頭脳であり、どんな状況でも淡々とロジックを組み立てる青年。第 5 話で、書斎から弾き出されてパニックになった陽花里の魂に、憑依されカラダを奪われます。しかし彼は、弾き出された後もパニックにならず、「あえて空中を彷徨う（フリーのまま待機する）」ことで、誰が誰を触り、どう入れ替わっているのかを幽体として冷静に俯瞰・観察していました。
- **第 10 話～第 13 話（陽花里のカラダでの謎解きと陥落）：**
  状況が完全に緊密したと判断した彼は、第 10 話で満を持して「陽花里のカラダ」へと憑依し、これまでの接触ルートをノートに書き殴り始めます。正体がバレると消滅するルールの心理戦のなか、彼は、卓越したロジックで「舞夜の最初の乗っ取り計画」や「大河のカラダが空だった理由」を完璧に見抜きます。しかし、彼が誤算だったのは、いま自分が使っている「陽花里のカラダ」に刻み込まれた、書斎での熱い愛撫の快感（余韻）でした。
- **第 13 話～結末（魔女への共感と定住）：**
  第 13 話で、琴葉（中身舞夜）から、女同士の愛撫（ルール上入れ替わらない）によりおしりを丁寧に揉みしだかれます。陽花里のカラダが記憶するエクスタシーによって理性を焼き溶かされた瞬間、舞夜の悍ましい魔力とともに、彼女の悲しい過去の記憶や孤独といった情動が理人の優しい心に流れ込んできました。ロジックを超えた圧倒的な共感により、彼は「舞夜を受け入れられるのは僕だけ」と狂信。陽花里のカラダに定住することを選び、舞夜（大河）と共に生きる「新たな魔女」として覚醒しました。琴葉の恋心に気付いたものの、舞夜に快感を与えるため、その感情を利用してしまいます…

物語の深み

第 5 話で陽花里にカラダを奪われてしまっても、冷静に幽体でいることを選択し、俯瞰して状況を観察していました。状況が切迫すると見ると、陽花里のカラダに乗り移り、第 10 話までで「魔女の思惑を完璧に粉砕した」ところまでは痛快でした。**しかし、理知的と思われていた彼も、その内は、それ以上に優しい性格であり、快感への抵抗もありませんでした。魔女は、そのことさえも見透かしており、彼は、魔女の篭絡を回避することができませんでした。最も魔女と対極にいると思われた彼が第 2 の魔女として覚醒してしまうことが他の 3 人へも絶望を与えてしまいます。**

4. 琴葉（ことは）

【魂の変遷】琴葉（1～2 話）＜被タッチ＞➔ フリー（2～8 話）＜憑依＞➔ 大河のカラダ（8 話）＜被タッチ＞➔フリー（8～9 話）＜憑依＞➔ 理人のカラダ（9～15 話）

- **第 1 話～第 2 話（秘めた想い）**：
  人見知りで控えめな少女。オカルトには興味がなく、密かに想いを寄せる理人の傍にいたいがためにこの館にやってきました。第 2 話の暗転時、舞夜によって弾き出された大河の魂に憑依されてしまい、魂を弾き出されてしまいます。フリーとなった彼女は、理人のカラダに入る勇気もなく、しばらく静観することにします。
- **第 2 話～第 9 話（生理的嫌悪と潜伏）**：空いていた大河のカラダに入るチャンスがありましたが、ガサツな男のカラダに入ることへの生理的嫌悪感から断念します。元のカラダに戻るか陽花里のカラダに乗り移る前段階として、第 8 話ラストの暗転で大河のカラダへと飛び込みますが、直後に舞夜に襲われ、再びおしりを揉まれて追い出されてしまいます。第 9 話、ついに意を決して、想い人である「理人のカラダ」へと滑り込みました。彼女の願いは、このまま理人のカラダに定住し、あわよくば自分の元のカラダ（琴葉のカラダ）に理人の魂を呼び込んで、最愛の理人と「表裏一カラダの究極の結びつき」を得ることでした。そのため、理人のカラダの中でじっと息を潜めていました。
- **第 10 話～結末（絶望からの歪んだ充足）**：
  第 14 話、陽花里のカラダに入った理人が、自分の想いを拒絶し、「僕は大河となった舞夜さんと、この陽花里のカラダで生きる」と宣言するのを目の当たりにします。理人の心が完全に魔女の快感に奪われたことに深く絶望しますが、彼女の愛は、歪んだ形で成就します。「せめて、カラダだけでも理人くんが欲しい。理人くんのカラダは私だけのモノにする」。彼女は、哀しみを満足へ変え、理人のカラダに永住することを決意。大河（中身舞夜）のおしりを激しく揉みしだき、魔女の完全定住の儀式を執り行う従順な下僕となりました。

物語の深み

第 2 話で大河にカラダを奪われた際、これを機に想いを寄せる理人のカラダに憑依する選択ができたものの、勇気がなくできませんでした。しかし、激しく動く状況に、自分がどうなるかわからないと焦り第 9 話で柄にもなく行動しますが、その焦りを魔女に突かれ計画は失敗します。ただそのことが**理人のカラダに憑依するという選択を後押ししてしまい、彼のカラダに憑依後、彼から絶望の言葉を聞きながらも定住を決意すると言う捻じれた愛に走ることになってしまいます。**

5. 魔女・舞夜（まや）

【魂の変遷】幽体（1～2 話）＜憑依＞➔ 大河のカラダ（2～5 話）＜タッチ＞➔ 陽花里のカラダ（5～9 話）＜タッチ＞➔ 大河のカラダ（9～10 話）＜タッチ＞➔ 琴葉のカラダ（10～14 話）＜タッチ＞➔ 大河のカラダ（14～15 話）

- **周到な計画と履行**：
  100 年前、村人の恐怖と嫉妬によって謀殺された心理学者。現世へ復活するための「自由に使えるカラダ」を求め、サークルメンバーにエロティックで冷酷なゲームを仕掛けました。第 2 話で、強靭な「大河のカラダ」を奪いました。そして、味方を増やすため、陽花里にターゲットを定め、第 5 話で陽花里を騙して書斎へ連れ出し、おしりを揉みしだいて陽花里のカラダを強奪。陽花里の魂が戻って来られないようシールドまで張る用意周到さを見せます。
- **ゲームの泥沼化と理人への執着**：
  しかし、完璧だった彼女の計画に誤算が生じます。大河のカラダが「空」であることを知らず、大河のカラダに戻ろうとした第 7 話の愛撫が不発に終わり、焦った琴葉の魂が大河のカラダに飛び込んだことで、魂のシャッフルが加速します。第 10 話で、自分の計画の全貌をノートに書き起こして暴こうとする理人（陽花里のカラダ）を見つけ、その高い知性に 100 年前の自分を重ね合わせ、強い興味と執着を抱きます。
- **完全なる凱旋**：
  彼女は、理人を消滅させるのではなく、女同士の特権を利用しておしりを丁寧に愛撫し、純粋な快感で理性を溶かしながら、自分の過去の絶望の記憶を流し込んで「精神的」に陥落させました。理人を最高の理解者に引き込んだ彼女は、第 14 話でついに大河のカラダを完全に強奪・定住することに成功。自分で自分のおしりを揉むよりも、理人を想う琴葉（理人のカラダ）に肉厚なおしりを抉るように揉まれることで、魔力とエクスタシーを極限まで循環させ、完璧な現世復活を果たしました。

物語の深み

舞夜は、肉体的優位性がある大河のカラダを奪い、彼を愛する陽花里の想いを利用し味方につけることで盤石の計画を遂行していました。**琴葉の予想外の行動にも冷静に対応するどころか、自らに有利な状況へと変えていきます。理人の看破に驚きつつも、彼の本質を見抜くことで、絶対的不利な状況も反転させます。最終的に彼女は、自分を理解し共感してくれた理人をパートナーとして選び、乗り移った中で、最も快感を享受することができた大河のカラダに定着し、物語を完結させました。**